

薬剤師 仲里 泰太郎

（派遣期間：2018年3月1日～3月22日）

2018年3月1日から3月23日まで私は日本赤十字社（以下、日赤）の緊急対応ユニット（以下、ERU）第5班要員としてBangladeshへ派遣されました。日赤 ERU 第5班自体は、私が到着する2週間程前から現地で活動を開始しており、私は途中からの合流となりました。私自身はこれが本事業への2回目の派遣でしたが、前回とはその業務内容が大きく異なっていました。前回は去年11月末から今年の2月末まで、避難民の方々の高い医療ニーズや感染症の流行に合わせて日赤の医療サービスを拡大、安定化させていこうとする中での業務遂行でした。今回は、日赤からBangladesh赤新月社へ医療サービスの実施を引き継いでもらい、日赤自体はその活動を縮小していくという局面での派遣となりました。

日赤 ERU 第5班に合流後、私の最初の仕事はフィンランド赤十字社（以下、フィン赤）が展開していたフィールドホスピタルへの支援業務でした。このフィールドホスピタルは3月の時点で展開から半年が経過

しており、慢性的にどの職種も人員不足に陥っている状態でした。既に私の前任の日赤 ERU 薬剤師が支援に入っており、私はその方から1日程引き継ぎを受けた後、フィン赤の要員が到着するまでの3日間業務支援を行いました。フィールドホスピタルは外来、病棟、Ope 室、更に出産設備を備えており、そこで使用する資機材、医薬品、そして輸血用血液を完全に把握して管理するには3日ではとても足りませんでした。

その後、到着したフィン赤の要員にフィールドホスピタルの業務を引き継ぎ、日赤



フィールドホスピタル内薬局の一部

ERUの要員としての活動を開始しました。まず、今後日赤が活動を縮小していくという方針に合わせ、その時点で日赤が保有している医薬品、医療消耗品をフィン赤へ寄付するという手続きに着手しました。かなりの品目数に登りましたが、名前、個数、消費期限をまとめた表を作成し、チーム全体やチームリーダーと話し合いを重ね、日赤本社に許可を頂いた後、無事にフィン赤へ寄付することができました。



フィールドホスピタル内の各病棟に払い出す薬剤・医療消耗品の準備をしているところ

前回の2か月と比較すると、今回は3週間とかなり短い期間の派遣でしたが、上述したような初めて経験する業務が多く、個人的に大きな経験と学びを得られた3週間になりました。今回の派遣では避難民の方と接する機会はほとんどありませんでしたが、これから現地はハリケーンのシーズンとなり、医療ニーズが再び高まる可能性もあります。その時、過去2回の経験を生かして、赤十字の職員として避難民の方々の支援に関わっていきたいと考えています。

第6班では薬剤師要員が不在であることを受けて、薬剤関係の業務が第6班の負担とならない様な準備も一つ大きな仕事の内でした。まず、今後も継続使用する薬剤、使用される可能性のある薬剤、そして抗マラリア薬についてそれぞれ用法用量を一覧にし、第6班活動期間中もカバー可能な量の在庫の確保を行いました。在庫管理の方法は基本的に第1班からほとんど形は変えていませんでしたが、よりシンプルに、システム化するために在庫管理のデータシート、在庫管理システムを全て一新させました。



最終日に日赤仮設診療所の薬局を点検しているところ